



バウハウスとYouTube

田中 辰明

お茶の水女子大学名誉教授

はじめに

コロナ禍のため、Onlineで行う仕事が増えた。情報発信もFacebook、YouTubeで行うことが多くなった。筆者が副理事長を務める(一社)日本バウハウス協会¹⁾も予定していた講演会などが実施できなくなり、YouTubeで情報発信をしている。

1. バウハウス

ドイツ帝国は1918年に第一次世界大戦で思わぬ敗戦を喫した。そして翌年ヴァイマル共和国が発足し、同時に国立の芸術学校「バウハウス」も発足した。

1919年に発足したヴァイマル共和国はヴェルサイユ条約により懲罰的な支払い不能の賠償金を突き付けられ、同時に起きたハイパーインフレにより、国民は生きる希望も無くしていた。これではいけない、国民に希望をもたらせようと、国は、国立の芸術学校「バウハウス」をヴァイマルに発足させた。そして初代校長にヴァルター・グロピウスが就任した。厭戦気分が溢れていた時代であったので教員は世界各国から集められた。

バウハウスの教員として参加したパウル・クレー(Paul Klee、スイス)、ヴァシリー・カンディンスキー

(Wassily Kandinsky、ロシア)、ライオネル・ファイニンガー(Lyonel Feininger、米国)などはこの時代を代表する芸術家である。これに加え、芸術教育に力を入れた教員がいる。ヨハネス・イッテン(Johannes Itten、スイス)、ラスロ・モホリ＝ナギ(László Moholy-Nagy、1895-1946ハンガリー)等多国籍の教員がいた。

これに加えて初代校長はヴァルター・グロピウス(Walter Gropius、ドイツ)、3代目校長はミース・ファン・デル・ローエ(Ludwig Mies van der Rohe、ドイツ)で、この2名は近代の4大建築家に名を連ねる。2代目の校長はハanneス・マイヤー(Hannes Meyer、スイス)で、マイヤーは校長として精密な教育プログラムを作り、自らもベルリン郊外ベルナウの研修学校など素晴らしい作品を残した建築家であった。

(一社)日本バウハウス協会ではコロナ禍により講演会などでの情報発信が不可能となったので、YouTubeで情報発信を行っている。まずは、バウハウスで活躍をした教員(マイスターと呼ぶ)別に発信した。ここでは誌面の制約からパウル・クレーとヴァシリー・カンディンスキーの例を紹介する。

2. パウル・クレーのYouTube

クレーは1879年にベルン近郊のミュンヘンブッフゼーで生まれた。父親はドイツ出身のハンス・クレーと言い、州立師範学校の音楽教師であった。母親はスイス人で音楽に造詣がある人であった。その様な家庭環境で育ったパウル・クレーも音楽に親しみ、特にバイオリン演奏が得意であった。学校の成績も優秀で数学を得意とした。当時のエリートが通うベルンのギムナジウム(日本の旧制高等学校)に通い、卒業後1898年、芸術の都ミュンヘンに出た。そこでハインリッヒ・クニルの私塾で絵画の勉強を始めた。1901年、イタリアに研修旅行に出かける。育ったベルン、修業を行ったミュンヘンの冬は日照時間が短く、冬は暗い町であったが、イタリアは冬も太陽が照り、明るさに感動を受けた。それ以来色彩に興味を持ち、色彩学の勉強をするようになった。また沢山見た魚や船に強い印象を受け、それ以降の作品に多く魚と船が描かれるようになった。1905年パリに旅行し、ルーブル他美術館を訪問しゴッダ、モネ、ルノワールの作品に興味を抱いた。1906年ミュンヘンの医者のお嬢でピアニストであったリリー・シュトゥンプフと結婚、ミュンヘンに住

んだ。

いくつかの画廊で展覧会を開催したが、出展を断られる事も多かった。1911年ミュンヘンでカンディンスキー、マルク、マッケ、ヤウレンスキー、ガブリエル・ミュンターらと知り合い、お互いに影響を受けた。そして青騎士のグループに所属し、展覧会を行った。1913年ベルリンの「シュトゥルム」で展覧会を開いた。このシュトゥルムで展覧会を開くことは芸術家にとっての登竜門であった。1914年「新ミュンヘン分離派」の設立メンバーとなった。この年友人のアウグスト・マッケらとチニジア旅行を行った。そして色彩と抽象に走り出した。しかしこの年第一次世界大戦が勃発し、芸術界は多大な損失を蒙った。マッケ、マルクは戦死し、クレーも1916~1918年従軍し、この間の作品は少ない。1919年に復員し、画商のハンス・ゴルツと総代理店契約を結んだ。これは1925年迄続く。1920年11月にヴァイマルの国立バウハウスから招聘を受け、受託した。バウハウスの形態マイスターとして「造形フォルム理論」を編み出した。1922年、盟友のヴァシリー・カンディンスキーがバウハウスに招聘を受け親しい交流が再開される。1923年にそれまでの成果を公表するバウハウス展がヴァイマルで開かれた。1924年にはニューヨークで展覧会が開かれ、米国でも有名になった。1925年バウハウスとヴァイマル市の折り合いが悪くなり、バウハウスは Dessau に移転した。Dessau ではクレーとカンディンスキーが同じ教員宿舎に住むようになった。1928年エジプト旅行を行い、ぎらぎら輝く太陽と明るさに感動する。この年、バウハウス校長ヴァルター・



図1 パウル・クレー「湿った交差点」1912年
白黒の素描画である。

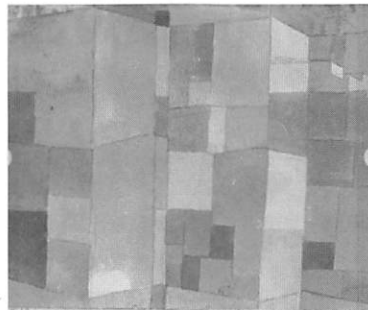


図2 パウル・クレー「オルタームディゲンの石切り場」1915年
オルタームディゲンはベルン郊外の町で、具象画から抽象画へ移行する作品である。



図3 パウル・クレー「フィッシュ」1921年
クレーは南イタリア、北アフリカに旅行し、色彩に目覚めた。また魚や港町、船舶に興味を持った。

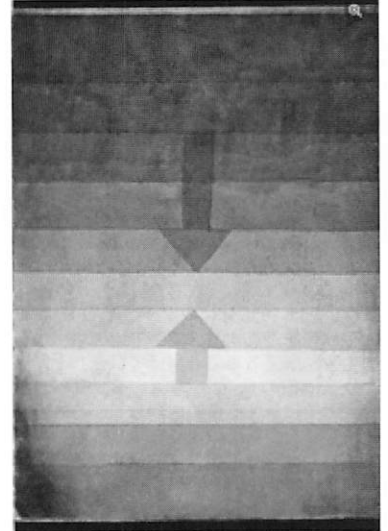


図4 パウル・クレー「方々の分離」1922年
「青紫と黄橙による色彩環直径上階層化」という副題がつく。色彩環上に向き青紫と黄橙という補色が画面上下に配置されている。これが平行線によって示され、矢印により、方向性が示されている。矢印アートである。クレーの作品には矢印の入る作品が多い。

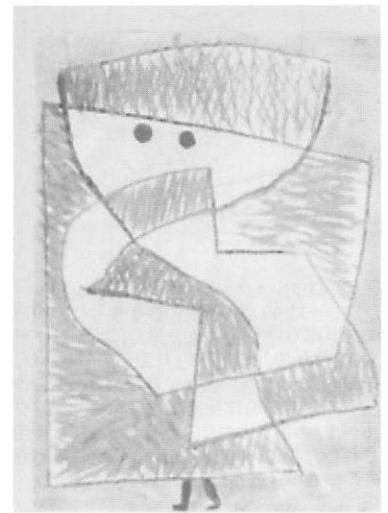


図5 パウル・クレー「ある子供が故郷へ帰る」1933年
クレーは意見の対立から1932年にバウハウスを辞任、デュッセルドルフの芸術アカデミー教授となった。しかしここでも台頭してきたナチスの弾圧に会い1933年失意のうちに故郷のベルンに戻った。この時の状況を自分を子供に例えて描いた作品である。



図6 パウル・クレー「インテンション」1938年

クレーは1936年に皮膚硬化症という難病に罹り死を予感する。絵画で世の中に自分の主張を訴える事に心掛けていたが、パウハウス同僚のNagyが写真、モンタージュで世の中に訴える事に成功していることが気になった。絵画の原点に戻り、原始人が使用していた造形記号に注目した。造形記号は原始人が住んだ洞窟で発見される。

クレーは造形記号を用いた作品を多く残した。簡潔雄渾な描線で、対象の象形文字を、モノメンタルな画面に描き出す手法。人間と宇宙とのかかわりを示した。



図7 パウル・クレー「鈴の天使」1939年

クレーは49点の天使の像を残した。1913年の「贈り物を届ける天使」に始まり、終焉1940年の「死の天使」に至るまでであるが、その内33点は死の直前に描かれた。この作品も死の直前の作品である。鈴は「ジャングルベル」のようにキリスト教の宣教にも使用された。クレーは1940年6月29日に療養先のロカルノ近郊で死去した。

グロピウスが辞任、後任にハンネス・マイヤーが就任した。マイヤーとクレーの間で意見の相違が生じた。1931年、クレーはマイヤーに辞表を提出し、デュッセルドルフの芸術アカデミーに教授として赴任した。クレーが去ったパウハウスは台頭し

てきたナチスの弾圧により、1932年デュッセルドルフからベルリンに移転し、校長ミース・ファン・デル・ローエの私立学校となった。1933年クレーはナチスにより、芸術アカデミーを解雇され、失意のうちに故郷のベルリンに戻った。ベルリンで制作に励むが、1935年に皮膚硬化症という奇病に取りつかれ、療養に専念する。

晩年は天使の絵を多数残した。回復不能な病魔と闘い、天使と語り合っていたものと想像される。また造形記号の絵画を残した。クレーは絵画を通して世の中に自分の考えを訴えようとしていた。しかし当時発達してきた写真技術などの方がより訴える力が大きいように感じたようである。パウハウス教員であったラスロ・モホリ＝ナギは写真技術で成功していた。モンタージュ写真は訴えるものがあつた。そこで、文字が未だなかった原始人が使用した造形記号で勝負しようと考えたのではなかろうか。造形記号は現在も原始人が住んだ洞窟で発見される。

1940年6月に長期療養の末ロカルノのムラルトで永遠不帰の旅に立った。

筆者のYouTubeでは合計300点近い作品を年代別に紹介している。あまりに多いので3部に分割している。第1部は112枚。第2部は81枚、第3部は99枚の画像からなっている。

3. ヴァシリー・カンディンスキーのYouTube

ヴァシリー・カンディンスキーは1866年12月4日にモスクワで生まれた。父は東部シベリア出身の裕福な商人、母は生粋のモスクワっ子であった。父方の祖母は蒙古の王族の娘であった。カンディンスキーの家

系に流れている東洋の血が彼の抱く神秘主義と結びついてくるものと考えられる。

カンディンスキーはモスクワ大学で法律学を勉強した。しかし絵画へのあこがれは強く、30歳で芸術の都ミュンヘンに赴き画家の道を目指した。そしてシュトックに師事した。1909年には「新芸術家同盟」の結成に奔走した。ここでカンディンスキーは非具象画を成立させた。色彩とフォルムを大切に画家であった。カンディンスキーはシュトックの門に学んだ後、1901年に早くも組織家としての道を歩み「ファールクス」という新印象派的な私塾を開いた。ここでカンディンスキーは若い画学生の為に描画とデッサンを教えた。

学生の中に後に画家として名を出す女性、ガブリエル・ミュンターがいた。ミュンターに指導をし、また恋仲になった。カンディンスキーは彼女の為にミュンヘンの郊外、シュタルンベルガーゼーという湖の近くの村、ムルナウに住宅を求め同棲する。ムルナウに住んでいた80歳になったガブリエル・ミュンターを米国の美術評論家ロディティがインタビューし、カンディンスキーの情報を得ている。これによると当初、具象画を描いていたカンディンスキーが抽象的、もしくは非具象的な作品を描き始めたとしている。カンディンスキーとミュンターがチュニジアの首都チュニスに滞在していた時に抽象画に強い興味を持ったと証言している。

1900年から1910年の間に友人たちの理解を得るのも難しい独特な抽象画を描き始めた。独特の芸術論を展開し、「芸術における精神的なもの」という論文を発表した。カンディ



図8 ヴァシリー・カンディンスキー「Gabrielle Münter」1902年

子供の時からテーマより色彩に興味を示していた。色彩とフォルムが何よりも関心事であった。「対象が僕をさまたげるのだ」。1901年にはミュンヘンで私塾を開いた。学生として、のちに愛人となるミュンターがいた。ミュンターと第一次世界大戦が勃発する1914年迄ミュンヘン郊外のムルナウで同棲し、沢山の作品を残した。後に抽象画の大家となるカンディンスキーであるが、当初は具象画を描いていた。



図9 ヴァシリー・カンディンスキー「青い山」1908年

カンディンスキーは青騎士グループ(Blaue Reiter)を結成しリーダーとなった。

ンスキーはバウハウスにおいても歴代校長の信任が厚く、1933年にバウハウスがベルリンで解散するまで、校長ミース・ファン・デル・ローエを支え副校長格で学生の指導に当



図10 ヴァシリー・カンディンスキー「構成の学習」1910年

1910年代のミュンヘンは専らカンディンスキーの舞台であった。ミュンヘンは標高520m、風光明媚な土地である。芸術に理解を示す歴代の王により、美術館、劇場、宮殿、大学が建設された。ユーゲント・シュティール、プラオエ・ライターもミュンヘンが活動の場であった。

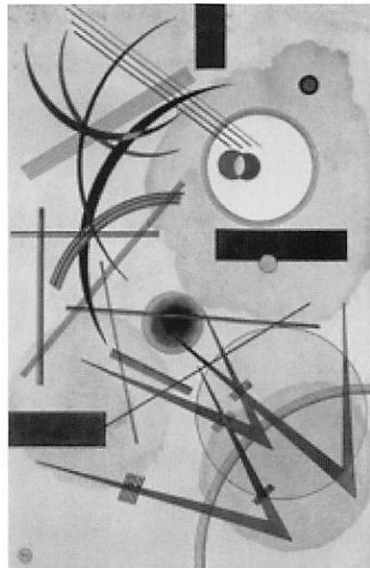


図11 ヴァシリー・カンディンスキー「グレースブルー」1925年

バウハウス教員時代の作品である。専ら抽象画を描くようになった。抽象画を描くには想像力が必要である。学生に想像力の涵養を喚起させる事がバウハウス教員として大切であった。

たった。

バウハウス解散後は失意のうちにベルリンを去り、フランスのNeuilly-sur-Seineに移住し、同地で1944年12月13日に逝去した。

筆者のYouTubeでは合計200点近い作品を年代別に紹介している。あまりに多いので2部に分割してい



図12 ヴァシリー・カンディンスキー「鮮明な静けさ」1927年

テッサウに移転したバウハウス教員時代の作品である。抽象画に専念した。想像力は建築計画、企業経営にも重要である。

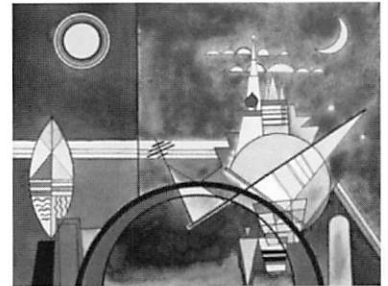


図13 ヴァシリー・カンディンスキー「キーウ(キエフ)のゴールデンゲート」1928年
ウクライナの首都キーウ(キエフ)を描いた。

る。第1部は100枚。第2部は86枚の画像からなっている。

4. バウハウスに関する筆者のYouTube

バウハウスに関する筆者が発表しているYouTubeには次のものがある。ご視聴いただければ幸いである。視聴者数が多くなれば、インターネットで検索が可能になる。しかし、現在のところ、視聴者はそれほど多くないので、筆者のホーム・ページ(<http://tatsut.org>)から検索していただく方法をお勧めする。ホーム・ページを開いて頂くと表紙の下に「私のYouTube」という項目がある。

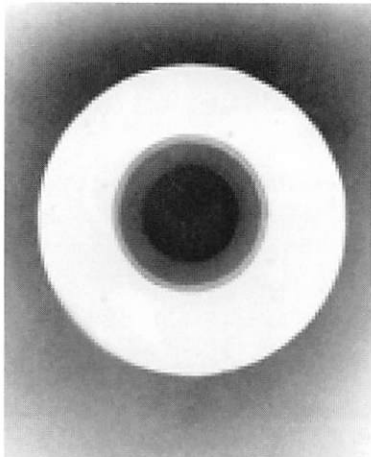


図14 ヴァシリー・カンディンスキー「教育」1931年

カンディンスキーはロシアに生まれ、時代の波に流され、ドイツとロシアを往復し、最後は安住の地をフランスに求めた。どこに行っても生きていけるためには教養が大切で、その基礎は「教育」であるとした。

これをクリックして頂くと筆者が公開しているYouTube一覧にたどり着く。そこでご希望のタイトルをクリックして頂くとご希望のYouTubeをご覧頂ける仕組みになっている。バウハウスに関しては次のものが公開中である。

- 1) バウハウスとパウル・クレー(第1部)改訂版
- 2) バウハウスとパウル・クレー(第2部)改訂版
- 3) バウハウスとパウル・クレー(第3部)改訂版
- 4) バウハウスとカンディンスキー



図15 ヴァシリー・カンディンスキー「ムーブメント(動き)」1935年

1933年からフランスのNeuilly-sur-Seineに住み、フランスでの作品である。

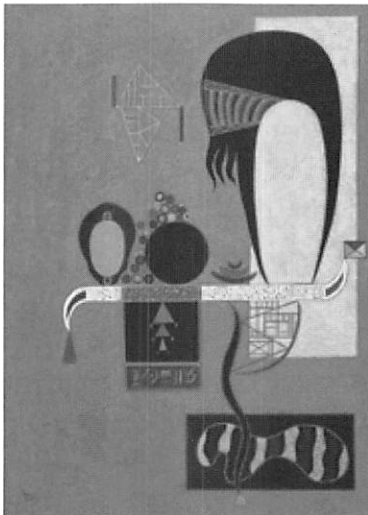


図16 ヴァシリー・カンディンスキー「飾り気のない2月」1943年

カンディンスキーは1944年に仕事を総仕上げし、逝去している。その前の年の作品で、全て枯れている2月の風景と自分を重ねた抽象画作品である。

- (第1部)改訂版
- 5) バウハウスとカンディンスキー(第1部)改訂版
- 6) バウハウスとヨーゼフ・アルバーヌ
- 7) バウハウスとヨハネス・イッテン(改訂版)
- 8) バウハウスとオスカー・シュレ

ンマー(改訂版)

- 9) バウハウスとヘルベルト・パイヤー
- 10) バウハウスとラスロ・モホリ・ナギ
- 11) バウハウスとファイニンガー
- 12) Bauhaus 100Jahre2

おわりに

誌面の都合で優秀な教員が多数いたバウハウスでパウル・クレーとヴァシリー・カンディンスキーを代表として紹介した。本誌で紹介されなかったバウハウス芸術家についてもYouTubeで紹介しているので、ご視聴頂ければ幸いです。

【註】

- 1) (一社)日本バウハウス協会
理事長：浅野忠利 〒168-0071 東京都杉並区西高井戸西1-1-19 高井戸西館4F
(Tel. 03-5941-9098)

【参考文献】

1. Facebook Bauhaus Art
2. 坂崎乙郎 「クレー」 美術出版社
3. 坂崎乙郎 「絵とは何か」 河出文庫
4. 坂崎乙郎 「夜の画家たち—表現主義の芸術」 平凡社ライブラリー
5. 利光功 「バウハウス・歴史と理念」マイブックサービス
6. パウル・クレー著、土方定一、菊盛英夫、坂崎乙郎訳、「造形思考(上・下)」ちくま学芸文庫
7. Magdalena Droste, "Bauhaus" Taschen
8. Jannine Fielder, Peter Feierabend, "Bauhaus" h. f. Ullmann
9. 南原実訳 「クレーの日記」新潮社
10. 前田富士男 「パウル・クレー造詣の宇宙」慶応義塾大学出版会
11. ハーヨー・デュイティンク、後藤文子訳「パウル・クレー—絵画と音楽」岩波書店
12. ダグラス・ホール、前田富士男訳「クレー」西村書店
13. 新藤信 「パウル・クレー—地中海の旅」平凡社
14. Ute Ackermann u. a. "Das Bauhaus kommt aus Weimar", Klassik Stiftung Weimar
15. Hans M. Wingler, "Das Bauhaus" Dumont
16. Johann Konrad Eberlein "Paul Klee, Meisterwerke", Schirmer/Mosel
17. Boris Friedewald "Die Engel von Paul Klee" Dumont
18. Zentrum Paul Klee Bern, "Paul Klee, Melodie und Rhythmus, Hatje Cantz
19. Brigitte Salmen Bauhaus Ideen, um Itten, Feininger, Klee, Kandinsky, Schloßmuseum Murnau
20. 田中辰明 「私の初夢...」日本にバウハウスを設立」月刊建築仕上技術2022年1月号